



エッセイ

帰り道には 招待状を携えて

SCA 11期 本間 知広

煌めく昆虫。巨大な恐竜。幼少の頃、両親に連れられ訪ねた博物館。展示を前にした私は、説明文まで夢中で読んで出会った世界にワクワクしました。

でも、帰りは決まって寂しかった。記憶力が良くないと、博物館で得た知識はすぐに忘れてしまう。ワクワクも手からこぼれ落ちていく。例えば映画館で映画を観た後は、学校で友達と語りあったり一人 DVD で反芻したりとその余韻を家へと持ち帰る。博物館でのワクワクは、私には持ち帰ることができなかった。

あの日のワクワクは博物館に閉じていると思っていた。出会った世界とは、その場でサヨナラだと思っていた。

違うんですね。歳を重ね、学び、気づきました。展示が教えてくれたのは、科学が切り拓いた世界でした。そして科学は誰もが触れられるべきもの。そう、あの日の世界は博物館の外に広がっている。またこちらから会いに行ける。なら、会いに行こう。

“名前だけでもメモをする”。再会の思いを込め、私が始めたことです。科学の世界はとても広い。闇雲に探しても見つからない。でも開けているのなら、手がかりがあればきっと見つかる。名前を元にちょっと調べて拍子抜けするほどあっさりと、再会を果たせることもある。

もちろん、いつも簡単とは限りません。ワクワクは

単調で難しい文章にも埋まっていた。でも掘り起こすことができたとき、より詳しく更新された情報が世界と私を出会ったときよりもっと仲良くしてくれた。その瞬間が嬉しくて、大変な道も名前を頼りに進んでく。

道程、ふと考えることがあります。最初に触れたのがこの複雑でムツカシイ情報だったら、あの日の私は楽しめたかな。頑張っ

きと科学が導く世界が大好きな人が、片鱗だけでも共有したくて、魅力をどうにか展示で伝えてくれてたんですね。だから私は楽しめた。もっと知りたいと思えた。ワクワクをくれたその人と、世界を少し共有できた。

博物館とは、科学的手法や知見が切り拓いた世界やその魅力を、それが好きな人達が紹介している空間である。再会を経て最近私が感じていることです。紹介しきれてない魅力が博物館の外にもある。

出会った世界にまた会いたいなら、もっと仲良くなりたいのなら、名前だけでもメモしてみよう。博物館でワクワクしたときには既に、誰かのワクワクを受け取っている。その思いさえ忘れなければ、メモした名前は科学の世界への招待状に変わるはずだから。

今回ご紹介した太刀川さんは、話の端々から航空機への愛が溢れてくる方でした。全く知識がない私も、インタビュー後は航空機が気になるように。SC スキルには様々なものがありますが、一番大事なものは情熱かもしれません。

次号もより魅力的な紙面を目指して制作を進めてまいります。今後も「サイエンスコミュニケーターだより」をよろしくお願いいたします。

過去のイベントの実施内容は「科博 SCAblog」をご覧ください。

<http://kahakusca.edoblog.net/>



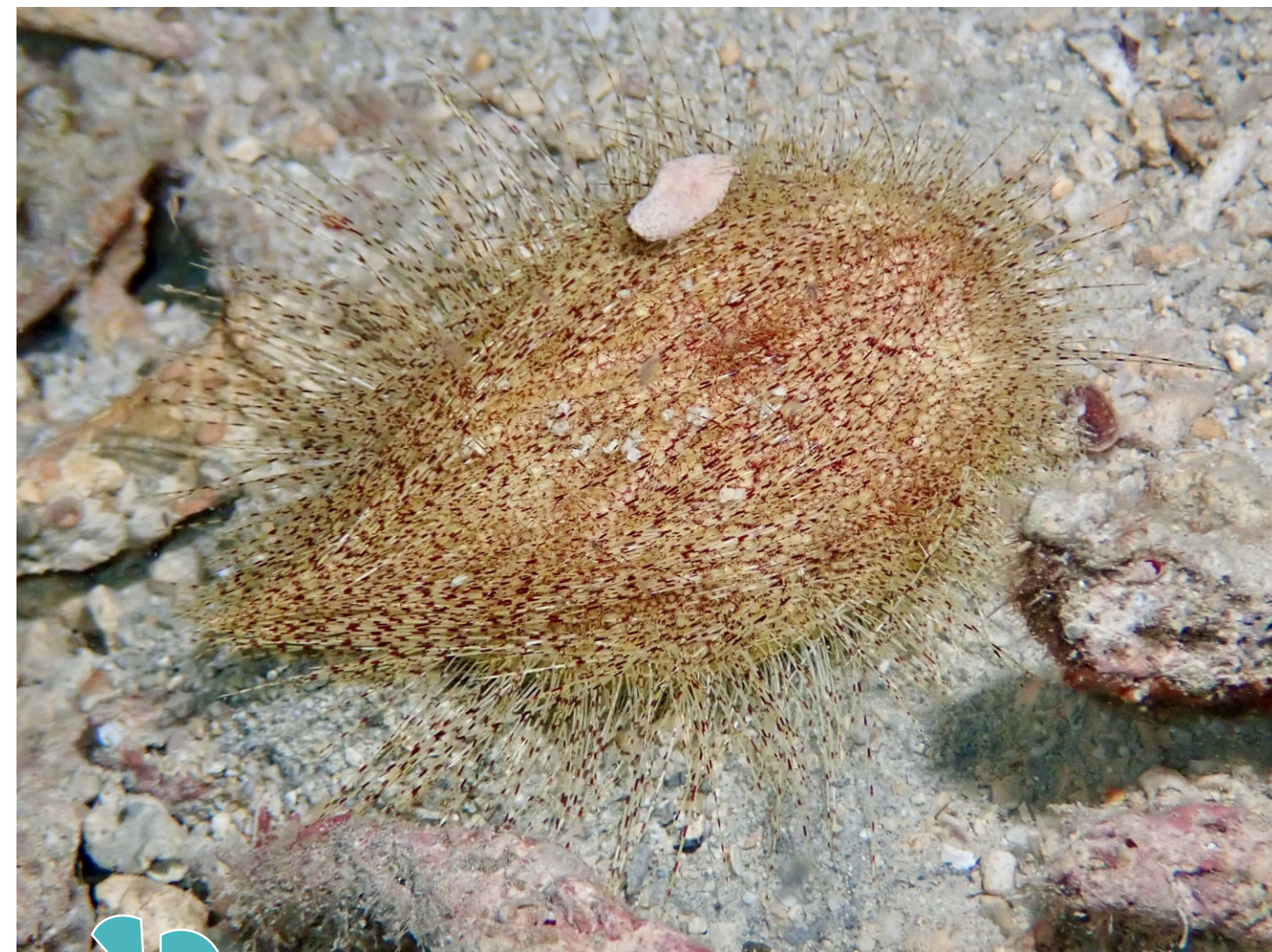
科博 SCA の広報誌

サイエンス コミュニケーター だより

Volume 17
January 2023



みなさんは「サイエンスコミュニケーター」を知っていますか？ サイエンスコミュニケーターとは、社会のいろいろな場面で「人」と「科学・技術」をつなぐ人材です。国立科学博物館も、2006 年度から「サイエンスコミュニケーター養成実践講座 (SC 講座)」を開講し、その修了生は 300 名以上となっています。本誌は、国立科学博物館の講座を修了したサイエンスコミュニケーターでつくる有志団体「国立科学博物館サイエンスコミュニケーター・アソシエーション (科博 SCA)」と、みなさんをつなぐ広報誌です。科学をさまざまなかたちで伝え、広めて共有していくコミュニケーターたちの横顔をご覧ください。



撮影：武田美亜 (SC 講座 5 期)

Question 表紙クイズ これは何だろう？

①カニ ②ウニ ③木の実

開いて
答えを
確認！

太刀川友凜 Yuri Tachikawa

国立科学博物館サイエンスコミュニケーター
養成実践講座 SC1 修了(15期)。
岐阜かかみがはら航空宇宙博物館学芸課勤務。
教育プログラムの開発や教室の企画・実施、令和4年度には空宙博企画展を担当。



「好き」は広く深く共鳴していく

Q. 現在のお仕事について教えてください。

A. 航空・宇宙関連の博物館で展示企画や教育を担当しています。

岐阜県の各務原市にある、国内唯一の本格的な航空と宇宙の専門博物館「岐阜かかみがはら航空宇宙博物館」で働いています。本館は、三式戦闘機二型「飛燕」をはじめとした多数の航空機の実機を展示している「航空エリア」と、宇宙開発の歴史や気象観測衛星、GPSなどの最新テクノロジーを紹介する「宇宙エリア」から構成されています。また、各務原市は「ものづくりの町」と言われており、飛行機に限らずさまざまな「輸送機器」の部品工場が集まっている地域です。本館は地域に根差した博物館として、そうした地域の産業を地域の人に伝えることも目的としています。私は学芸課に所属して、展示活動、教育活動などを担当しています。

Q. 企画展示を作る際に特に苦労することは？

A. 幅広い来館者に満足してもらえるようにすることです。

航空機に関して知識があまりない方にも、航空機の情報や魅力をどう伝えるか、どう文字に起こして

どう図式化したらわかりやすいかというのは、相当悩みます。一方で、企画展を楽しみに来てくださる方や遠くから来てくださる方の中には、航空機にとっても詳しい方も多くいらっしゃいます。そのため、展示の解説は知識の少ない方でも理解でき楽しんでもらえるようやわらかくしたいけれど、やわらかすぎると航空機に詳しい方に満足していただけないのではないか、というジレンマがあります。

そこで、実物の資料を展示したり、貴重な写真や当時の映像など、資料価値の高いものをできるだけ多くお見せできるように工夫しています。知識のある方でも、実物や、当時の映像を見たことがないという方は多くいらっしゃいますので、ご満足いただけていると感じています。

Q. お仕事の中でやりがいを感じたエピソードは？

A. 子どもたちが、好きな話を好きなだけできる仲間を見つけてくれたことです。

本館では飛行機に興味のある小学校高学年から中学生を対象にした教室を開催しています。少人数で、1日ばかりで行っているため、参加者同士も仲良くなれる教室です。あるとき、休憩時間に彼らが飛行機の話をしていて、すごく盛り上がっていたことがありました。イベント後、参加者の子がふと、「こんなに飛行機の話ができる子と会ったのは初めてだ」「学校だと、みんな飛行機の話には興味がないから話せなかったんだ」と言ったんです。その言葉を聞いて、この教室を通してその子の人生を変えるかもしれない貴重な出会いがあったんだな、そして、私たちはそういう場を作れたのだな、と感じ、嬉しかったです。彼らが大きくなったときにまた会えたら、博物館での思い出など教えてほしいですね。

Q. これからやりたいこと、目標などありますか？

A. 飛行機への情熱がある「なんでもできる人」になりたいです。

実は私は学生時代から飛行機が大好きで、全国の航空祭や飛行場を巡っていたほどでした。そんな私なので、今後も、自分自身が「飛行機が好き」という熱量を持ち続けてコミュニケーションをとるのを大切にしたいです。飛行機に興味がない人でも、「飛行機が大好きな太刀川」に興味を持ってもらえれば、何かのきっかけで飛行機に関心が向いてくれると思っています。飛行機が大好きな私だからこそできるコミュニケーションなのかな、と思います。

また、館内の仕事という点では、「なんでもできる人」になりたいですね。館としての目標は「航空宇宙産業の促進」「地域に愛される博物館」です。その目標に向けて、自分のできる事の幅を広げたいです。

Answer ②ウニ

これはウリザネフススクというウニの仲間です。夜行性で、昼間は砂の中に潜っています。食用などでよくみるウニは綺麗な円形ですが、フススクの仲間は少し縦長になっています。それでも基本的な形は同じで、ヒトデやナマコにも共通する、五放射相称（体の中心から同じ構造が5つの方向に放射状に並ぶ）という特徴を持っています。

